

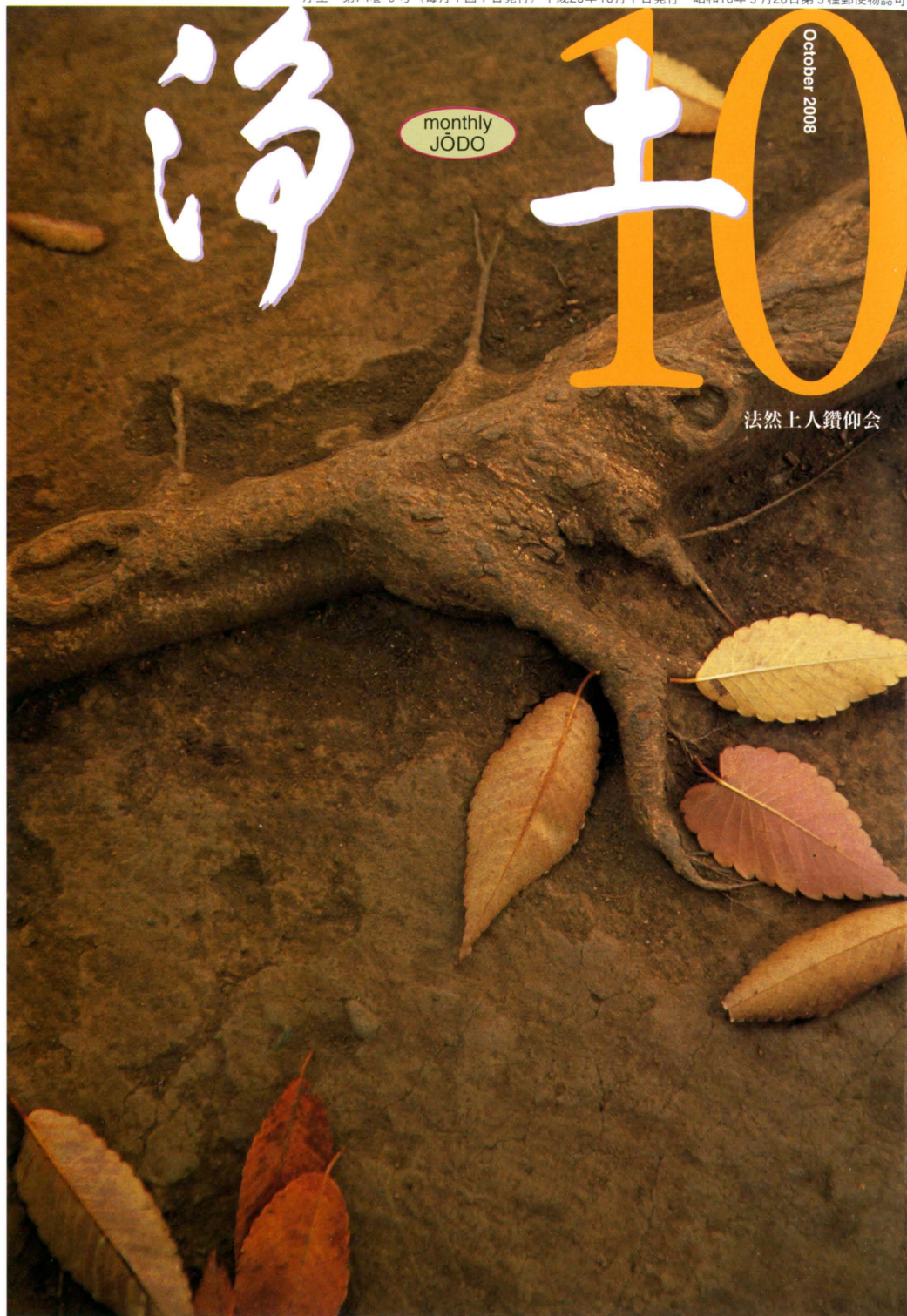
浄

monthly
JODO

10

October 2008

法然上人鑽仰会



あるいは人の苦にあうを見て、
三途の苦を思いやれ。
あるいは人の死ぬるを見て、
無常の理をさとれ。
あるいは常に念仏して、
その心を励ませ。

「十二箇条の問答」

鬼海弘雄『浄土』2008年年間表紙写真の人

きかいひろお 1945年山形県寒河江市生まれ

法政大学文学部哲学科卒業。山形県職員を辞して、トラック運転手、造船所工具、遠洋マグロ漁船乗組員など様々な職業を経て写真家に。1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞受賞。

写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版1987年、『India』みすず書房1992年、『や・ち
また：王たちの回廊』みすず書房1996年、『東京迷路』小学館1999年、『印度や月山』
白水社1999年、『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館2001年、『Persona』草
思社2003年、『べるそな』草思社2005年、『In-between8 鬼海弘雄 ポルトガル、マル
タ』EU・ジャパンフェスト日本委員会2005年、『東京夢譚』草思社2007年、『集合住
宅物語』みすず書房2004年（撮影・鬼海弘雄 文：植田実）、『メッセージ』樹立社
2006年（撮影・鬼海弘雄 文：都はるみ）

世田谷

森巖寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



創建四百年を迎える八幡山浄光院森巖寺本堂
と第十六世加藤昌康住職。下北沢の街中ながら
緑豊かな境内は参詣者の憩いの場となっ
ている





本尊阿弥陀如来立像と観音勢至両菩薩が高いところに祀られ、その下を歩いて通れる。珍しい内陣だ



三つ葉葵の紋が入った結城秀康公の位牌と位牌を納める厨子。秀康は江戸を思いながら越前で最期を迎えることになる



山門には栗嶋大明神の額がかかっている。淡島堂(左)には虚空蔵菩薩が祀られている。

淡島幼稚園の前庭には樹齢四百年を超える銀杏の木が聳えている。参道を挟んだ反対側の銀杏とともに区の指定保護樹となっている



花火で全焼する前の庫裡。縁側に座っているのは先代住職の姉と妹。この庫裡の前庭は映画の撮影が頻繁に行われるほど、立派な庭園だった

ライブハウスや劇場などに集まる若者で下北沢はいつもにぎやかだ

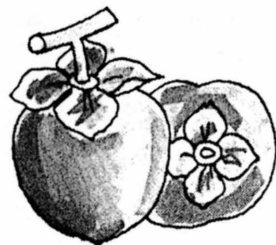


浄土

2008/10月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 世田谷 森巖寺	撮影=タカオカ邦彦	1
講演概録 現代の信仰のかたち	梶村 昇	6
寺院紀行 世田谷 森巖寺	真山 剛	14
会いたい人 戌井市郎さん②	関 容子	24
響流十方	小村正孝	32
江戸を歩く 第二十回	森 清鑑	36
法然上人とその時代 壇の浦	石丸晶子	42
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	49
誌上句会	選者=増田河郎子	50
編集後記		52
連載 教えと法話	生野善應	

表紙題字=中村康隆前浄土門主
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎



法然上人鑽仰会

公開講演会

その一

現代の信仰のかたち

法然上人の

視
線
でみる

今

梶村昇

亜細亜大学名誉教授



「現代の信仰のかたち」という、まことに難しいテーマでございます。副題が「法然上人の視線でみる『今』」でございますので、最初に法然上人の視線とは何かということを先に決めて、それから、その目で「現代の信仰のかたち」というものを見てまいりたいと思います。

〔1〕法然上人の視線——その一つとしての「現実重視」

まず、法然上人の視線というのは何だろうかという、視線はたくさんありますが、その一つとして、現実を重視することだと思えます。要するに、観念で物を考えないということです。現実には立脚して物を見る。私は、それが法然上人の生涯を貫いた視線であらうと思います。

法然上人は十五歳で比叡山に上がります。当時の比叡山は、日本の最高学府、しかも、ただ一つの最高学府と言ってもいいと思うんです。ですから、全国の秀才が全部比叡山に集まってきました。

仏教が五三八年に日本に渡ってきたということになっておりますが、それから法然上人が比叡山に上がるまで約六〇〇年あります。その間比叡山を中心に研究に研究を重ねてきたわけですから、比叡山の学問というのは非常に強固で精緻な学問体系をもち、華厳教学と並んで、大乘仏教最高の教学だと言われておりました。

もう一つ大事なことは、法然上人は「智恵第一の法然房」と言われるほど頭がよかったということです。これは法然上人を語る上で非常に大事なことだと思えます。智恵第一の方が最高学府である比叡山に入り、真剣に仏教に取り組まれたということです。

その結果としての言葉が、

「仏教多しと雖も詮ずるところ戒定慧の三学をば過ぎず」

ということです。キリスト教はバイブル、旧約と新約です。ところが、仏教というのは、ご承知のように、バイブルが何十冊もあるような經典があるわけです。その仏教を一つに概括するということは、非常に難しいことです。仏教がわからないというのは、入り口がわからないからなんです。ところが、法然上人はそれを一言で、「仏教多しと雖も詮ずるところ戒定慧の三学をば過ぎず」とおっしゃったわけです。

「戒」は、戒律を守ることです。

「定」は、心を定めて動かさない。簡単に言うとなんて簡単です。

「慧」は、学問です。

仏教というのは、戒律を守り、心を一所に定めて、学問をして真理を知ることだ。大乘仏教も、小乗仏教も、顕教も、密教も、あらゆる仏教がみんなそれなんだとしつかりと押さえるのです。

ところが、「我がごときはすでに戒定慧の三学の器ものに非ず」と、自分はそれできないという。これが「現実重視」ということなのです。比叡山は、それができるものとして学問が成り立っているわけです。ところが、法然上人は、「三学非器さんがくひき」自分は戒定慧の三学の器ではないと言っております。

戒律一つ見ても守れない。坐禅をして心を定めようとすると、私の心は猿のごとくあつちへ行ったり、こつちへ飛ぶ。慧は智慧第一の法然房ですから、一番得意のところなんです。それでも「真に到達することはできない」と言っていらいっしやる。

「我がごときはすでに戒定慧の三学の器ものに非ず、この三学のほかにわが心に相應する法門ありや」

戒律一つ守れない、心の定まらない、学問もできない、ということは、すなわち私たち自身なのです。そういう者にふさわしい道があるだろうか、というのが、法然上人のスタートです。それが法然上人の視線だと思います。

その視線から、今日は日本の仏教史と現代の信仰を見たらどうなるか、考えてみたいと思います。

〔2〕日本仏教史を顧みる——葬式仏教論に対する答

現代仏教に対して、今だけではない昔から言われていることなのですが、「日本の仏教は葬式仏教ではないか。お釈迦さまの仏教に帰れ」。これは江戸時代から言われている仏教に対する批判の言葉です。

それに対して仏教界から「そんなことはない」という大反論があってもよいと思うのですが、まことに声が小さい。どこかでおっしゃっているのでしょうか、どうも反論が少ないのです。

というのは、もっともな点があるからなのです。日本の仏教は葬式仏教なのです。釈尊の仏教に帰れと。そのとおりです。だから声が小さいのです。しかし、これを法然さんの目から見たら何と申すでしょうか。

「日本の仏教は葬式仏教だ、というのは観念です」と言うのではないのでしょうか。

1. 異宗教交流の類型

イ. 程度の高い宗教から低い宗教へ流れる。

どこの国の宗教史を見ましても、全部、異宗教がまじり合っている歴史です。簡単に日本の宗教史を見ますと日本列島に日本人が住んでいた。そこに儒教が来た。仏教が来た。織田信長のときにキリシタンが来た。鎖国になった。明治になって信教の自由になった。これが簡単にいう日本の宗教史ですが、それを見ますと、全部、異なった宗教が交流し合う歴史だったと言えると思います。

それを調べているうちに、当然のことかもしれませんが、幾つかの原則があることがわかりました。

これは当たり前で、何も取り立てて言うことはないのですが、宗教というのは、その国の生んだ最高の文化です。異宗教と言いい、異文化と言っても同じことです。文化というものは、水の流れるように高いところから低いところへ流れるのです。

例えば、ヨーロッパ文化をアフリカへ持っていくますと、瞬く間に広まるのです。ところが、失礼ですが、アフリカの文化をヨーロッパに入れようと思っても、これはなかなか流れない。文化は、高いところから低いところへ流れる。宗教も同じで、これは反論の余地のないぐらい正しいことだと思えます。

仏教が日本に伝わってきた。仏教は高度な宗教です。だから、瞬く間に広まった。飛鳥時代から奈良時代、平安時代と仏教は瞬く間に広まりました。

□ 伝来側・受容側双方が変容する。

ここで、観念と現実が分かれると思うのです。高いところから低いところへ流れてきた。とすると高い文化と受け入れた側とがイコールになりますか。それを考えてみていただきたい。高い文化が低い文化のところへ入ったのですから、両方イコールになりそうに思うでしょう。それが観念です。なりはしません。入ってきた方も、受け入れた側も両方変化します。決して同じものにはならないのです。これが現実です。

観念ですと、高い方が入ってきたから受け入れた、だから日本仏教は釈尊の仏教と同じになるはずだと思います。それは観念です。法然上人に言わせれば、そうは現実にはならないよということだと思ふのです。

ハ 変容させるものは民族の三つ子の魂

何がそれを変えるかと言いますと、その民族の持っている三つ子の魂だと思ふのです。ちよっと耳なれない言葉かもしれませんが、私は「民族の三つ子の魂百まで」ということが成立すると思っています。

「三つ子の魂百まで」という言葉を我々は知っています。これは個人の能力のことを言っているわけです。確かに、私たちは生まれたときからそれぞれみんな自分の「三つ子の魂」を持っています。

ですから、幼稚園から小学校、中学、高校と同じものを習ったとしても、みんな人によって違ってきます。習ったものが、みんな同じになるのだったら、習えばみんな同じになるはずで。ところが、幾ら習ったって、みんな違ってしまいます。なぜ違うのですか。

三つ子の魂があるからです。その人の能力です。それが「三つ子の魂百まで」という諺です。

それは民族にも当てはまると思うのです。だから、よその高い文化が入ってきても、こちらの文化、日本人は日本的に受けるのです。

タイへいらっしゃった方が大勢いらっしゃると思うのですが、タイも仏教を受けたんです。それがタイ国の仏教なんです。中国も受けたんです。朝鮮半島もそうなんです。ミャンマーもそうです。スリランカもみんなそうです。みんな仏教を受けたんです。だけど、全部違うのです。それが当たり前、それが現実なのです。現実重視なのです。

それを変容させるのは何かというと、その民族の持っている「三つ子の魂」です。

2. 民族の三つ子の魂

民族には民族の三つ子の魂がある。

そこで「日本民族の三つ子の魂」は何かという、大変大きな問題にぶつかるわけです。いろいろありますが、柳田国男氏の『先祖の話』によれば、日本人は祖先崇拜の宗教なんだとおっしゃっています。言葉を換えれば、根っここの宗教です。日本人の根っこなっている宗教です。

五月三十日の読売新聞で、宗教心の世論調査していました。

いろんな項目があるのですが、おもしろいのは、「あなたは何か宗教を信じていますか」に対して、信じている二六％、信じていない七一％という状況です。

その調査項目の中で、「あなたは自分の先祖を敬う気持ちを持っていますか、持っていないか」

ませんか」というのがあって、持っているというのが九四%です。これはこの調査の中で一番高い数字です。持っていないが四・五%です。

要するに、日本人というのは、大昔から今日この読売新聞の世論調査に至るまで、祖先を敬うということが、日本人の「民族の三つ子の魂」、根っここの宗教だと思ふのです。

ちよつと話が余計なほうへ行つてしまいますが、三つ子の魂がどういうところに大きく影響するかというと、一つは、生きているときはその国の言葉です。日本人が日本語を使う。これが三つ子の魂の最たるものです。

私も英語の端くれを少しやりましたが、言葉は発想が違うわけです。ですから、民族が言葉を失うということは、その民族が三つ子の魂を失つたということです。だから、言葉を失つてはいけません。

戦後、日本語をフランス語に変えようと言つた文学者がいました。ご存じですか。偉い人だから名前は言いませんが、フランス語が今世界で一番品がいいから、フランス語に変えようというわけです。

明治時代には、日本語を全部英語に変えようと言つた文部大臣がいました。殺されちゃいましたが……。

自分の国の言葉を失つたら民族の滅亡です。だから、三つ子の魂が一番最初にあらわれるのが言葉です。

もう一つは、魂が死んだらどこへ行くか。柳田さんがおっしゃっていますが、日本人は亡くなつたら魂は山へ帰る。そして里の人を見守ってくれる。これが日本人の先祖観です。

(つづく)

寺院紀行

世田谷

森巖寺

撮影／タカ才力邦彦

文／真山剛



森巖寺山門

浄土宗が現在のように一宗派として確立されたのは徳川家康が浄土宗に帰依したことによるところが大きい。

織田信長は比叡山、天台宗の僧兵に悩まされ、豊臣秀吉は本願寺、浄土真宗の一揆に悩まされた。しかし、この両武将に仕えた家康は二人の二の舞を踏まずに仏教諸宗派と争わないどころか、むしろ味方につけることで二百六十年に及ぶ江戸幕府の礎を築いている。

では、なぜ浄土宗に帰依したのか。家康の戦場での旗印、「厭離穢土 欣求浄土」という極楽浄土への切なる想いだったのか、あるいは当時の諸宗派を治める鍵が浄土宗と見たのか、はたまた松平時代の縁や恩からなのか。その真意はともかく、浄土宗は徳川家康の帰依によって江戸時代初期にその寺院数を飛躍的に伸ばし、その教線を全国に広げ、現在の教団につながる基盤を確立したことは間違なく、その拠点となったのが江戸である。

今回はその徳川家との縁深く、創建四百年を迎えた東京世田谷区下北沢の八幡山浄光院森巖寺、徳川家康の次男結城秀康の位牌所として一六〇八年に現在地に創建された名刹を訪れた。

さて、家康の次男秀康だが、兄信康が亡くなれば家康の後継者となるはずだったが、その出自により疎まれ十歳で豊臣秀吉の養子に入る。といっても、これは小牧長久手の戦での家康と秀吉の和睦条件での人質だった。しかし、幼少の頃から文武に優れた秀康は秀吉

の信頼を得て羽柴秀康と名乗ることになる。だが、秀吉に嫡男ができると下総国の結城家へ縁組し家康のもとへ戻される。天下分け目となった関が原の戦では武勇に長けた秀康は西上を懇願するも、武勇に長けるが故に自国を守らせようとした家康はそれをはねつける。こうした行き違いもあり結局徳川姓に戻ることなく三十四歳で結城秀康は病死する。兄信康が信長の命で二十歳で切腹させられたことを思えば、最後は越前六十七万石の藩主となった秀康の生涯は決して不遇とはいえない。ただ、家康と秀吉という偉大な二人の父をもった波乱万丈の生涯であったことだけは間違いない。

さて、その秀康は江戸から遠く離れた越前で、乗院住職万世和尚に自分の死後に江戸の地に一寺を建立し、自らの位牌所とせよと命じている。

そして、この遺命を託された万世和尚が高齢ゆえ弟子の孫公和尚に託して建立されたのがこの森巖寺である。その建立にあたっては北沢八幡の別当寺院とし、寺域は天領となった。そしてその八幡を山号、秀康の戒名を院号寺号として、八幡山浄光院森巖寺と命名された。徳川家の位牌を祀る御霊屋（位牌所）の多くは天下泰平後に創建されているが、森巖寺はその直前、歴史の狭間の瞬間に創建された由緒ある寺院なのである。

その由緒ゆえに昭和の始めまで松平家の子孫が定期的に森巖寺を

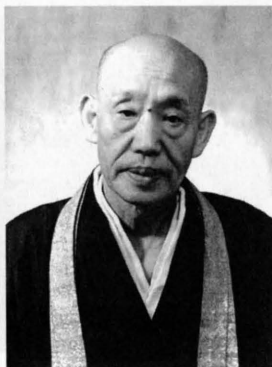
訪れていた。三つ葉葵の紋の入った秀康の位牌にその子孫が手を合わせ、供養後はやはり三つ葉葵の漆器でもてなしをする。それが慣わしだったという。今は本尊下の厨子に祀られる秀康の位牌に刻まれた三つ葉葵と本堂前の門扉の三つ葉葵がその格式を伝えるだけとなっている。

さて、この森巖寺だがこうした徳川家との関係の一方、庶民に愛されるお寺としての顔がある。境内に祀られる淡嶋大明神への信仰である。

江戸時代、女性や子供に関するありとあらゆるご利益を授ける守り神と崇められたのが淡島信仰で、医療と医薬の神の少彦名神がその祭神だ。その淡島堂が創建当時から森巖寺の境内に佇んでいるのだが、その由来は開山上人に遡る。

開山の存廓上人は持病の腰痛で悩まされていた。そこである時淡島明神に祈願したところ、お灸を据えろとの夢告をうける。そこで早速お灸を据えたところ積年の腰痛が嘘のように完治した。では、と淡嶋さまの老家、紀州淡島明神を勧進しお祀りしたというのが森巖寺の淡島堂の由来である。そしてまた、腰痛を治してくれたお灸が淡島明神のお告げによるものと、「粟嶋の灸」として歴代住職が施灸するようになり伝え続けられている。

森巖寺の檀家で大正生まれの鈴木さんが昔を振り返る。



森巖寺第十四世加藤昌円上人(右)と第十五世加藤昌光中興上人(左)

「栗嶋さんのお灸は三と八の日でね、そりや、人が集まりましたよ。お灸するのは近隣の農家の人で、門前には飴売り、柿売り、ミツ豆屋さん、で、夏はカキ氷ね。とにかくいっぱいお店が並ぶから大変な人出でねえ。回りは田んぼばかりでしたけど、その日はみんなしてあぜ道を森巖寺に向かうんですよ」

栗嶋のお灸をどれだけの人たちがすすてもらったのか……。森巖寺には大正十四年に開かれた森巖寺葵日曜学校を前身とし、昭和二



本堂に向かい合うように建つ閻魔堂。閻魔さまに舌を抜かれるぞと子供たちが恐がっていた時代が懐かしい



森巖寺には針塚がある。毎年二月八日の針供養は、物を大切にしたい先人達の思いを伝えている区の無形文化財だ



森巖寺開山上人が彩色した法然上人御終焉之図。江戸時代末期に寺宝を整理した第十一世孝譽上人の裏書がある

十七年に開園した淡島幼稚園がある。幼稚園になってからも既に五十六年目を迎えているのだが、その園舎の所に施灸所があった。

山門を入って左手奥の栗嶋堂から参道と平行に渡り廊下でつながった間口六間、奥行五間の建物が施灸所で、七間、十一間の当時の本堂の半分近い大きなお堂だ。そしてこの栗嶋のお灸の跡は一目でわかるそうで、江戸時代の小説などにはこの栗嶋のお灸の跡を描写した記述が数え切れないほど出てくる。もともと南都仏教時代の寺院は施薬所や病院の役割を果たしていたこともあり、お寺での施灸は不思議なことではない。調べてみると同じ世田谷区の下馬にも「下馬のお灸」として有名な真言宗のお寺があった。だが、こちらは三十年前から施灸は行なっていないという。

さて、このお灸だが、大きく分けると有痕灸と無痕灸の二つになるそうだ。無痕灸は跡が残らないもの、有痕灸は跡が残るもの。「栗嶋の灸」は有痕灸なのだが、ここで森巖寺の加藤昌康住職のお灸の話を聞こう。

「お灸はもぐさに線香で火をつけて火傷直前で止める治療法なのですが、そのタイミングがとても難しい。敢えて熱を持たせた施灸部に治癒能力を集中させ、さらに膏薬で体内の老廃物を取り出す。

一度お灸するとその跡が残りますから、今度は自分でその場所に灸をすることが出来る。このように二度目からは自分でできる

のがお灸のいいところですね。

今では先代のお灸の弟子が必要に応じて行なっていますが、現代は肌に残る跡を気にする時代ですから、何か現代版の「粟嶋のお灸」を見つけてはと思っています」

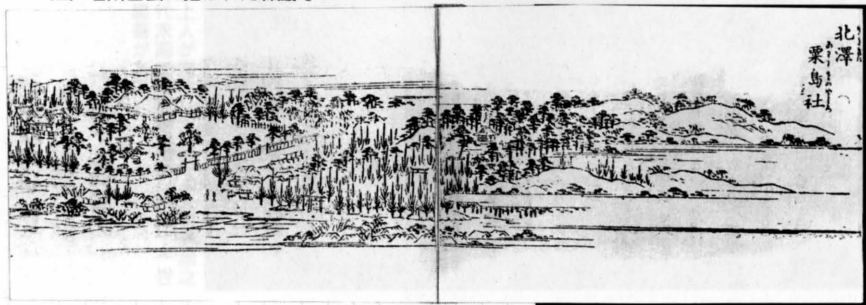
こう話してくれた加藤住職、森巖寺の第十六世となるのだが、江戸初期創建の寺院の住職はほとんどが二十世を過ぎているのに、開創四百年で十六代目というのだから、ここの歴代住職一人ひとりの在任期間は長い。徳川の寺という格式を持ちつつも、淡島さまのお寺、お灸の寺という信仰と医療の両輪があり、多くの信者と触れ合える環境が歴代住職にとって魅力あるものだったのかもしれない。

加藤住職はその森巖寺に昭和三十一年に生まれたが、当時の境内には大きな池があり、その水面すれすれに枝を伸ばす立派な松があった。これも大正生まれのお檀家、第九代目太郎左衛門を名乗る岸田さんが思い出してくれた。

「大きな池の奥、今の淡島堂の裏に築山もあってね、そりゃ素敵な庭でしたよ。本堂と庫裡の間をつなぐ太鼓橋をくぐると墓地でね。菩提樹もあって、藤山と呼んでいた藤の花が綺麗な小山もあった。それに何と言っても銀杏の木が森巖寺の象徴でしたね。そうそう、ご先祖が森巖寺の念仏講で使っていた鐘がまだ残っていますよ」

と、わざわざその伏鐘を出してくれた。直径約八センチのその鐘

江戸名所図会に描かれた森巖寺



には下北沢村講中の文字が彫られていた。

さて、岸田さんが教えてくれた築山だが今はもうない。昭和三十九年に境内で遊んでいた学生の火花が庫裡に引火して全焼、当時の住職、第十五世昌光上人がその再建のために築山のあった角地を整理せざるを得なかったからで、現在は世田谷区の出張所になっている。

もう一つの築山は鍋島山とも呼ばれ、富士山を遠見するための盛り土したものだ。そして昭和の始め頃には第十四世昌円上人が飛び地墓地や家墓をこの小山に回りに移転している。もともと徳川家のお寺だけに境内に墓地はなく、飛び地墓地だったのである。しかし、その移転が大雑把だったことに加えて土地が傾斜していたため通路等が整備できていなかった。

そこでお年寄りには危険なこともあり、現住職が決断して整地し、整備されたお墓と開山堂の建立に踏み切ったのである。ちなみに小山は世田谷区の教育委員会の調査後整地されている。

このように昔とは大きく様相を変えた森巖寺の境内だが、この大整備こそ森巖寺開創四百年記念の大事業であり、そこには住職十年目を迎える加藤住職の新たな思いが込められている。

「いま環境問題が盛んに論議されていますが、環境問題でまず反省することは、私たちが世界のことより自分たちの身の回りのことを



整然と並ぶ新墓地

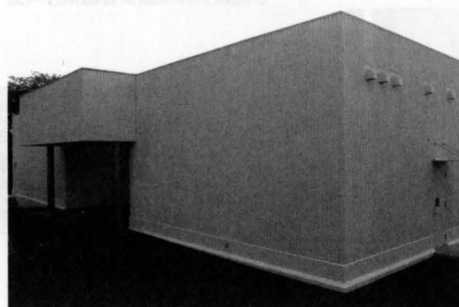
優先してきたことです。そして、私たちは先祖からいただいた自然の中で生かされていると同時に、今の自然を子孫から借りている、という意識を持つことです。

仏教は自然を慈しみ、命を尊重する教えです。仏教の拠点である寺院が環境問題に取り組むのは当然のことで、森巖寺が開かれたお寺となる一つのテーマはより良い環境を次の世代へ引き継ぐ実践の場にすることだと思っています」

慶応大学の哲学科で美術史を、さらに法律学科にも席を置き、同時に淡島幼稚園も手伝ってきた加藤住職。お寺生まれのお寺育ちながら相当世間の広い住職だ。その住職が描く環境に取り組むお寺とは一体どんなお寺になるのだろうか。

一番楽しみにしているのは浄土の秀康公に違いない。

(ルポライター)



開創四百年記念事業として阿彌陀如来が祀られる開山堂が建立された。ここから環境を考える新しい森巖寺の一步が始まる

増上寺第八十七世 成田有恒 台下ご遷化

平成二十年九月六日 八十六歳にて心不全のためご遷化された。

天蓮社大僧正超譽上人英阿大吉有恒大和尚

師は昭和九年に浄土宗僧侶となられ、東京世田谷の大吉寺住職を拝命。以後浄土宗宗議会議員など浄土宗の要職を歴任され、平成三年に浄土宗宗務総長に就任。平成七年に大本山増上寺八十七世法主に推挙されておりました。

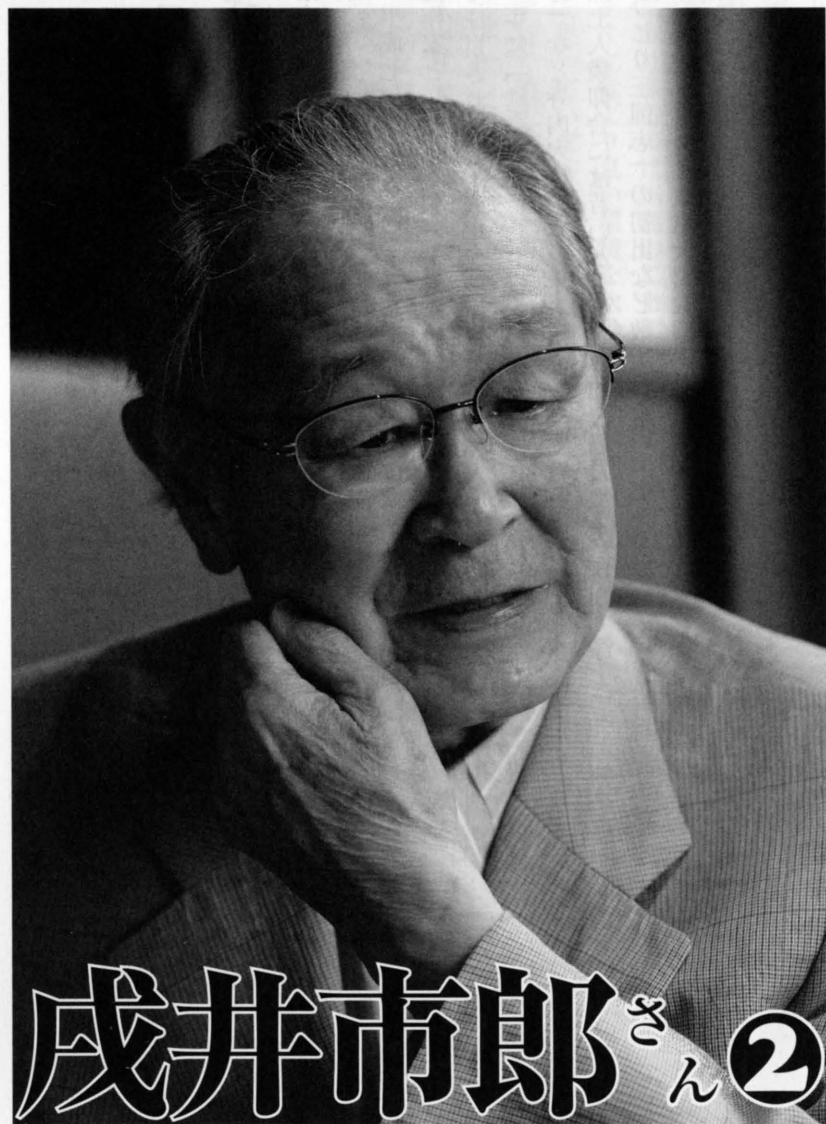
また作家として、昭和五十五年に「逢春門」で、サンデー毎日大衆文芸に入選して注目され、五十七年には司馬遼太郎氏らと同人誌「近代説話」を創刊、六十一年に「はぐれ念仏」で直木賞を受賞された。「名なし如来」「念仏ひじり三國志」など寺内大吉のペンネームで数多くの著書がある。

法然上人鑽仰会には若いときより参加ご協力頂き、月刊「浄土」への執筆は、「念仏ひじり三國志」の初出など数知れない。また、最近では八百号記念講演会で、日本カトリック東京大司教岡田武夫師との対談は、多くの人を魅了した。表葬儀は、総本山知恩院門跡坪井俊映猥下の御導師で、

十一月四日 午後二時より、増上寺大殿本堂にて執り行われる。

連 載

会いたい 関 容子 人



成井市郎^{さん} ②

撮影／タカオカ邦彦

戌井さんの演劇人生で、六十年間を文学座で共に過ごした杉村春子。平成九年の一月六日に満九十一歳を迎えたあと、急に体調を崩し、一月のテレビの仕事途中で降り、三月の新橋演舞場『華岡青洲の妻』もキャンセル、五月の文学座創立六十周年記念公演にも出演できないまま、四月四日に亡くなった。

「わたしは杉村さんより十歳下なんです、二人共あまり病氣らしい病氣はしたことがなかった。杉村さんは昭和二十四年に、超過密スケジュールのせいで紫斑性ロイマチスという手足が痛む病氣になって、地方公演の残り三ステージを休演しました。杉村さんの休演はたったこれだけです。で、このときの主治医だった慶応の石山先生と二度目の結婚をしています。その前の長広先生も慶応のお医者さんで、どちらにも先立たれてる。肺結核ですよ。丙午（ひづうま明治三十九年）生まれの女の人というのは夫を早死にさせるとか、昔はよくそんなことを言ったものでしたよね。で、わ

たしのほうは、七十歳のときに脳の外側にちよつと血が溜まったのを手術したくらいのもので、あんた手術したら前より頭がよくなつたわよつて、杉村さんが喜んでくれましたけどね（笑）

杉村春子は二十一歳で女優を志して広島から上京し、築地小劇場に入った。試験日でもないのに、演出家土方与志の面接だけで入団が決まり、すぐに初舞台。

「その時分、女優のなり手が少なかったからでしょうね。築地出身で、のちに有名になった女優さんは、東山千栄子、岸輝子、村瀬幸子、山本安英、田村秋子、細川ちか子、それに杉村春子……。昭和二年が杉村さんの初舞台です。『彼女』（藤森成吉）という芝居のオルガン弾きの役で、せりふはなかった。それから二年間はほとんど休みなしで、二十六本もの作品に出ています。しかし脇に出ていてもだんだん目立つ存在になってきて、志賀直哉が早くから杉村さんの舞台に注目してい



「女の一生」の作者、森本薫没後五十回忌法要での戌井さんと杉村春子さん(左)そして平淑恵さん(右)。京都の誓願寺にて

た、というのやさずがと思いますね」

「築地出身」というのは、築地と名のつく築地小劇場、劇団築地小劇場、築地座の三劇団のことで、杉村春子は文学座に入る前の十年間、ここに所属していた。

志賀直哉が杉村春子の舞台に感心したのは築地座の大阪公演で、『瀬戸内海の子供ら』（小山祐土）のハイカラ堂のおかみさん役。

「阿川弘之さんの『志賀直哉』という著作で知ったことですが、築地の芝居も終わりのころはかなり赤がかってきていて、役者がスロ—ガンめいたことを舞台で怒鳴ると、お客が『異議ナシ！』と叫ぶ、というのを里見弴から聞いて、志賀さんはそんなのを見ても仕方がない、と思つてた。谷崎潤一郎も赤毛もの（翻訳劇）はかなわない、と言つてたし、志賀さんは小山内薫とは古い知り合いだったにもかかわらず築地小劇場へは一度も行かなかった。しかしあるとき、奈良に住んでいた志賀さんが大阪の文楽座へ行つて、友田恭助、

田村秋子夫妻の脇に出ていた杉村さんのうまさに注目した、というわけですよ」

志賀直哉の杉村晶貞は戦後も続く。

昭和二十三年六月、文学座の公演が二日間、熱海市で行われたときのこと。

「多分、志賀さんと谷崎さんの後押しがあつて実現した文学座の公演でしょうね。わたしは『驟雨』（岸田国士）の演出と舞台監督を兼ねていたので、芝居の進行中はずっと舞台裏にいました。あとで聞いたら北村和夫はまだ学生服で客席にいて、オジサンオジサン、帽子取つてくれないかな、見えないんだよ、つて言つて、振り向いた顔を見たら、小説の神様志賀直哉なんでびっくりした、つて話です（笑）。それで幕があいて、杉村さんが登場したら『杉村！』と声をかけた人がいる。新劇ではあんまりなことなのでみんな驚いたけど、あとでその掛け声の主は志賀さんとわかつて、楽屋中に歓声が上がったのですよ」

平成二年の「花霞」の舞台のとき新潟の料亭で。左から戌井さん、森光子さん、杉村春子さん、江守徹さん



戌井さんは杉村春子の七十年に及ぶ女優人生を、公私にわたって見つめ、支え続けてきた。中でもそのデヴィューに戌井さんが深くかわった劇作家、森本薫との恋愛については、特別の感慨を抱いている。

「昭和十五年、岩田豊雄先生が森本薫に入座をすすめたので、彼は京都から新婚の和歌子夫人を伴って上京してきました。そのとき二十六歳でした。京都にいたところからラジオドラマとか文芸雑誌に発表する戯曲とかの収入で、生活の見通しはついていたんでしょね。それで上京してきて、文学座のために五本の

作品を書いています。彼は『新劇の岡本綺堂になりたい』と聲っていて、わかりやすく面白く中間文学的戯曲をめざしていたようです。最初の仕事は田中澄江さんとの共同脚本『陳夫人』で、このときが杉村さんとの出会いですよ。彼女の着物姿は、回りがみんな中国服なのでひととき目立つ存在だった。脚本は人物がよく描けていたし、こういう心理劇は文学座の最も得意とするところなんです

が、演出の里見さんが、せりふを里見好みの文体にしてしまつて、芝居運びも何となく新派ふうになった。それを森本が憤慨して、稽古場に顔を見せなくなる、ということがあつて、杉村さんが心配して森本をなだめた。そういうことが恋愛に結びついてゆくわけですよ」

森本薫が杉村春子の口ケ先など宛に出した手紙が何通かあつて、戌井さんは晩年の杉村からそれを見せられた。戌井さんの著書『芝居の道——文学座とともに』には全文、紹介

されていて、昭和十九年にはかなり親密な間柄だったのがわかる。

「音楽会はどうでした。どんな顔して歌ったのか見たいようなものだナ。君の歌は少し気分を出すすゝ巻舌で、バタ臭くなるヨ。：君に説教されること、僕はちつとも厭でないから、いうべきことはいつて貰います」

「君がいつまでも帰らんのなら、僕はもう京都へ行つちまう。何のためにこんな所でぼやぼやしとるのかわけわからん。女房が来るというのもその前に話し合っておきたいこともある、と思つて待たせていたが、もう来ていいといつてやる」

と、相当なものだ。

「戦争が激しくなつて、森本は奥さんを京都へ疎開させていたんですね。森本は一人になつて、杉村さんとは家も近かつたし。しかし恋人だったのはほんの短い期間だったでしょうけど」

森本薫はその後肺結核となり、病床で『女

の一生』改訂の筆をとったりしていたが、昭和二十一年十月六日、三十四歳で亡くなった。

「その日、わたしは帝劇の稽古場にいたんですが、杉村さんがいつの間にか入ってきて、わたしのそばへ近寄ると、薫が死んだわよ、と言うなり、ワツと泣き崩れたんですよ」

森本薫が杉村のために書いた『女の一生』の布引けいは杉村春子生涯の当たり役で、上演回数は実に九百四十七回に達した。

最後の公演は平成二年六月、サンシャイン劇場からスタートして、八月に名古屋で千秋楽を迎えたが、このとき杉村春子は八十七歳だった。

「少女時代から演じるのがさすがにつらいと言って、グロテスクに見えたら興ざめだから、誰も見てないところでならやりたいけど……、とずいぶん渋ってましたが、結局わたしが口説き落としました。稽古場に入ったらだんだん年齢が気にならなくなったのは、さすが芸の力ですね」

杉村春子は森本薫没後五十年（平成八年）になつて、ようやく布引けいの役を手放す決心をする。

「わたしは杉村さんに、平淑恵で『女の一生』をやることにしようと思う、と伝えなければ、いい返事が得られなかった。その前に松竹から波乃久里子で、新派の舞台へかけたと言つてこられたときも、結局断りましたからね。誰にも渡したくないんだな、と察はついたけども、今度ばかりは心を鬼にして、押し進めました。それで森本没後五十年の四月に、京都の森本家の菩提寺に未亡人の和歌子さんと長男次男夫妻が大阪から出ていらして、こっちは杉村さん、わたし、平淑恵で墓参りをして、新しい『女の一生』の上演を報告したんです。そのときに、未亡人が何を思ったか、森本が杉村さん宛にしきりに手紙を書き送つていた同じ時期に、自分によこした手紙、というのをそつとわたしに見せてくれた。それなりに優しいことが、適当に書いて

あつて、彼も男だな、と思ひましたね（笑）」
その森本和歌子宛の手紙には、

「早くお前に逢いたい。……こうなると一日も早く行つていざという時、子供連れて逃げるようにしたい。……何かの方法でゆくからそれ迄心細かろうが頑張つていてくれ。……今日も又和歌子のことおもひながら」

とある。それにしても戌井さんは、女性二人からそれぞれ手紙を見せられているのがすごい。

「布引けいの役を引き継ぐとしたら誰だろうと考えたのは、杉村さんが六十二、三のころ、六百回前後で限界を感じて、これで終わりにしようと一度宣言したときなんです。これが十年早ければ荒木道子だと思つたけど、荒木はこのとき五十二、三歳。太地喜和子とも考えたけれども、太地ももう四十半ばでした。それでぐつと若い平淑恵を、ということになつたんです」

平成八年八月、三越劇場で初演を迎えたそ

の『女の一生』は、十二月まで各地を巡演し、各新聞には「継承成功」と好評だった。

「杉村さんの古いファンの方々も見に来てくれて、よかつた、と褒めてくださるんだけど、これ杉村さんには内緒です、つて。当の杉村さんは、芸術座で『晩菊』という芝居に江守徹と出ていて、『女の一生』を見てくれたのは千秋楽に近い千葉市の舞台でした。終わつて、平さんがよくやつたわ、と言つた以外、多くを語りたくなさそうだったので、わたしもいろいろ問いただすことはしませんでした。杉村さんがいくら自分自身に言い聞かせていても、きつと寂しい思いを味わつたに違いないと思うと、それが役者の宿命だとは知りながらも、ひどくやりきれない気持ちになつたものでしたよ」

（つづく）

或る人、法然上人に、「念仏の時、睡におかされて行おこたり侍る事、いかがしてこのさわりをやめ侍らん」と申しければ、「目のさめたらんほど念仏し給え」とこたえられたりける、いとうと
とかり。

〔徒然草〕

ある人が、法然上人にこんなことを尋ねました。

「お念仏を称えている時、眠氣に襲われておろそかになってしまいますが、
どうしたものでしょうか」

すると上人、

「目が醒めている時にお称えなされ」

とおこたえになったといいます。

なんと尊いことではありませんか。

立ち止まっていんです

拝啓 はじめまして。突然のおたより、失礼致します。

いつも、貴社各線を便利・快適に利用させていただいている一市民です。この場を借りて深く感謝を申し上げます。

貴社はことに近年、環境問題への取り組みも一層強められており、快適性と環境性を両立させた新車両を次々と開発、投入されるなど、社会貢献において誠に目を見張るものを感じます。社員の方々のご苦勞、真摯な姿勢に深く敬意を表する次第です。

前置きが長くなってしまいました。

実は先日、貴社系列の都内某線に乗車中、「立ち止まらない人になろう」と書かれた吊り広告を目にしました。近づいてよく見ると、貴社の新幹線チケットレスサービスの広告。「紙」の切符を購入することなく、カードを自動改札機にタッチするだけでOK、貴社系列のJ□東□本の在来線から貴社新幹線へ、さらに同じく貴社系列のJ□西□本の在来線へと、複数の社をまたいでの乗り換えもそのままスピーディーにという、極めて便利なサービスのお知らせでした。見る人を惹きつけ、脳裏に焼き付けるキャッチーなコピー、シンプルでわかりやすいデザインは、さすがJ□□海だとうならせるセンスが光っています。

立ち止まらない人になろう――。

うまく表現できないのですが、なんかこう、スマートというか、おしゃれというか、とってもポジティブなイメージを与えるコピーですね。

そういえば最近、流行っていますね、この手の広告。缶コーヒー、栄養食品、ファッション……。ノートパソコンや鞆を小脇に抱えたビジネスマンが、戦士のごとき表情で、ネクタイをはためかせて颯爽と走っている写真の広告やポスター、よく目にします。慌しく動き続けることがいかにもカッコイイような、そんな風潮が浸透してきているのかな、なんて感じています。

人間、仕事に打ち込む姿や表情はカッコイイし、尊いことです。でも、貴社のコピーをお借りすれば「立ち止まる」ことはカッコワルイ、といった強迫観念めいたものが、私たちの日常生活に漂っているのではないか、そんな風に感じるのは、小生の偏見でしょうか。

毎日朝から深夜まで仕事に追われ、趣味に興じるなんてとんでもない、自分を振り返る余裕など持つこともできずに、肉体的・精神的に逼迫して病を得、ついには命を落したり、あるいは自ら……。そうした悲劇を伝える記事は珍しくありません。そもそも、走り続けることなんて不可能なのです。立ち止ま

つてこそ、また次に走ることができるはずと思えてならないのです。

「立ち止まらない人」でいること、大賛成！ 改札口では。

でも、ときには立ち止まりましょう。

この場合、「立ち止まらない」ことと「立ち止まる」ことは、「陽」と「陰」というふうにも言えまじょうか。陽があれば陰がある、陰があるから陽は輝かしいものとして存する。表裏一体ってこのことかなあ、なんて。

「ああしなければならぬ、こうでなければならぬ」があまりに強いと、自分をも他人をも追い詰めることにつながる、そこにお互いが気付ければ、もっとゆったり和やかに暮らせると思うんです。

あつ、すみません。何も、貴社の広告に異議を唱えようというのでも、苦情を申し述べようというのでもありません。誤解を招いてしまったら、お許しください。貴社の広告を見て、ちょっとこんなことを考えさせられたので、お礼かたがたしたためてみただけです。たわごとと捨て置きください。御無礼致しました。貴社の益々の御発展をお祈りします。

敬具

平成二十年中秋

一利用者より

J□□海広報部御中

(小村正孝)

第二十回

江戸を歩く

運河の町



森清鑑

大江戸ウォーカー

山王御旅所

与力、同心の家宅が密集している、八丁堀組屋敷の北端が茅場町である。そこに山王御旅所（なぐし現日枝神社）がある。赤坂溜池に隣接する、將軍家産土神、日吉山王大権現社のいわば出先機関、摂社である。なぜここに御旅所が置かれているかといえ、赤坂、麴町から茅場町に至る江戸っ子は、皆、山王社の氏子だったことによる。ゆえに、天下祭りの多数の大きな山車や神輿は、赤坂、麴町から城内に入り、將軍に拝謁し、再び城を出て、八丁堀界限、靈岸島町内を練り歩き、この旅所を目指す。いわば、権現社の神輿がここまで御旅する処であった。しかし、当時の江戸っ子にとって、ここは、茅場町の薬師様といえ、ピンときたのかも知れない。薬師堂は山王権現、山王宮と並んであり、今と違って、境内も広く、勧進相撲も行われ、月二度の縁日には大変な賑わいを見せた（現在、日枝神社

の背後、道を隔てた智泉院が薬師堂の別当である。したがって、境内は、これを含み、前後左右に広がっていた。明治になって、廃仏毀釈により、薬師様は別離された）。ともあれ、天下祭りに見る、武士も町民も一緒になって練り歩く長蛇の列には見応えがある。神輿が靈岸橋を渡って、旅所に迎え入れられる様は、「実には大江戸第一の大祀にして一時の壮観たり」（江戸名所図会）と記されている。江戸期、山王御旅所の南と東側は、与力、同心の組屋敷に囲まれていた。だが、旅所の北側は、細い川が東に向かって亀島川まで流れている。この川の北側に細長く沿って続くのが、千川屋敷である。玉川上水の工事に携わった人々が拝領した屋敷。千川（仙川）とは、玉川上水の別名。そして、千川屋敷の、さらに北側一体が南茅場町である。この町並は、日本橋川に面する茅場河岸と続く。茅場町は、江戸以前、海中にあり、江戸初期には葦や茅の生い茂る沼沢地であった。家康は、

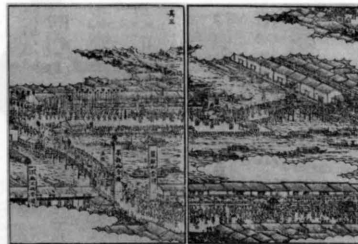
ここを埋め立て、茅職人を移住させる。茅場町の起こりである。そして江戸時代は、酒問屋、材木屋、傘屋、瀬戸物屋、舟問屋、饅頭屋などが大賑わいを見せていた。

霊岸島

茅場河岸と南茅場町の間の道を東に歩くとすぐに霊岸橋に出る（日本橋水門辺り）。橋は、亀島川が日本橋川に注ぐ処に架かっており、その光景はダイナミックである（現在の橋は、これより南の永代通り）。橋の左手には、広い日本橋川が滔々と流れ、数えきれぬ舟が渡航している。橋の中央からこの川を見ると前方左に崩橋（箱崎町方面）、前方右に湊橋が見える。橋の右手は、亀島川（越前堀）。この川を南に下れば、右側・西河岸は与力、同心の組屋敷。さらに船を進めると、亀島橋（現在も位置は同じ）。これを潜ると越前堀と名を変える。川の東、つまり左側の霊岸島に越前福井藩松平越前守の広大な中屋敷（三万



◆江戸名所図会 薬師様縁日



◆江戸名所図会 山王御祭礼光景 日本橋川。左が湊橋、右中央が靈巖橋



◆現在の茅場町摂社日枝神社

坪)があつた。幕末に活躍した松平春嶽の屋敷である。そしてこの日本橋川、亀島川、大川に囲まれた処が霊岸島である。

そこには、寛永の頃、檀蓮社雄誉上人が建立した霊巖寺の大伽藍があつた。霊巖寺は浄土宗十八檀林のひとつ。この頃の古地図を見ると、島全体が霊巖寺の観がある。ところが日本一の江戸城天守閣をも灰燼せしめた、明暦の大火(一六五七)が起こり、広大な霊巖寺も皆無と化し、以後、深川に移ることになる。そしてその後もこの寺に由来する地名が残された。

新川

霊岸橋を渡り、日本橋川沿いに大川に向かつて行く。左手、湊橋を眺め、対岸の箱崎町、北新堀町を眺めながら歩くと、豊海橋に出る。と、そこは広大な大川である。左手に長さ百二十間の永代橋が架かつている(永代橋は現在、永代通りの敷設とともに豊海橋の右(南)

◆現代の霊岸橋中央から亀島川を望む。川の右側一体は与力・同心の組屋敷であつた。



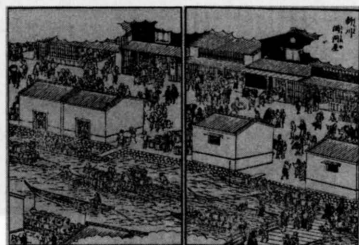
◆霊岸橋中央から、反対の日本橋水門を見る。その向こうは日本橋川。江戸の霊岸橋はこの辺りにあつた。



に位置することになった。豊海橋を左に見て、右（南）に曲がって進むと、やがて大川沿いに三の橋が架かっている。これが新川である（新川は埋め立てられ、町名として残った。嘗ての日本橋川と新川の中間を永代通りが走っている）。この川は、大川と越前堀（亀島川）を結び、堀から大川に向けて順に一の橋、二の橋、三の橋が架かっていた。川の左右には、酒問屋がひしめき、上方から運ばれてきた上物の酒（下りもの）を味わうことができた。江戸っ子にとって、新川は、酒処そのものであった。そして、川の北側一帯に元禄期、河村瑞賢の大邸宅があった。

河村瑞賢は、江戸が生んだ大実業家である。明暦の大火で木曾の材木を買い占め、財をなした。彼の妻は、その後の海路の開発や水路治水の土木事業にある。東北から日本海、下関、大坂、下田経由で江戸に物資を運ぶ、西回り航路、阿武隈川から房総半島を経て下田から江戸湾に入る東回り航路を開発し、大

幅な物資輸送期間、費用の短縮に成功した。東北の米もこれによって江戸庶民が口にすることができた。しかも輸送の新技術を駆使し、格段に安全な航海を実現。大阪淀川河口の治水工事を初め、全国各地で治水、灌漑、鉱山採掘、築港、開墾を行っている。日本を股にかけた、その事業スケールの大きさは、希に見るもの。その功により、幕府より旗本に列せられている。しかも、瑞賢は虚心坦懐、学問を大いに尊び、新井白石にも惜しみなく財政支援している。彼が今日に至るも尚、崇拝されているのはこうしたことによる。元禄十二年、八十三歳で、ここ新川の邸宅で没した。現在の永代通り、新川一丁目交差点に瑞賢邸宅跡の案内板が立てられているが、その位置は邸宅の表門で、裏門は新川近くにあったようである。瑞賢の墓は、鎌倉建長寺の左脇道を登ったところにあるが、広い地にポツンと墓が立っている、簡素なもの。周囲の木々が秋になると、紅葉で美しい。



鎧の渡し

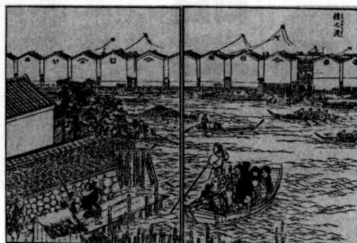
再び霊岸橋に戻って、茅場河岸と南茅場町の境道を歩く。すると、牧野豊前守上屋敷の塀にぶつかる。右に曲がると、鎧の渡しの渡しの船着き場がある。石段を下りる。この辺り、日本橋川に橋がないので、処の江戸町民が、非常に重宝した。江戸名所図会で長谷川雪旦は、渡しの光景をリアルに描いている。多数の舟が行き交い、町民を運んでいる。左は牧野の屋敷、日本橋川の対岸は蔵地。蔵がずらりと並び、鎧河岸が見える。人々は何故、鎧の渡しと呼ぶようになったのか。八幡太郎源義家が奥州遠征の際、ここから下総の国を目指して海を渡ろうとした。ところが大荒れ。義家はやにわに鎧を海に投げ、竜神に祈る。すると、波は治まった。この故事は、江戸の町が埋め立てでできる前、江戸湊が眼前に広がっていたことを物語る。牧野の上屋敷には、兜が祀られていた。現在の兜神社である。義家

は奥州戦勝のお礼に、ここに兜を納めたのである。牧野屋敷が現在の東京証券取引所があるところで、兜町は、これに由来する。

渡し舟に乗って、川に出ると、左手に江戸橋や掘留川に架かる橋が見える。川を渡って、蔵と蔵との間を縫う、鎧河岸に上がると、そこは日本橋川沿いに連なる小網町。庶民に馴染み深い、最も賑やかな処でもある。居並ぶ蔵を左手に見て北に進むと、東掘留川入り口に思案橋が架かっている。男どもが吉原に行くか、行かぬか迷った橋である。この橋を左に見て東掘留川に沿って歩く。右手に銀座、さらに行くとなり芝居小屋がひしめく葺屋町、堺町が控えている。

【参考文献】

新版「江戸名所図会」(角川書店)
「江戸明治東京重ね地図」(株)エービーピーカンパニー



◆江戸名所図会 鎧の渡し。左、牧野屋敷の塀、日本橋川を渡り、対岸の蔵と蔵の間を、鎧河岸に上がる。

法然上人
とその
時代

シリーズ第五章

壇ノ浦

第三回

作

石丸晶子

画
アーサ



七

壇ノ浦周辺の激しい潮の流れは、東流から西流へ、西流から東流へ、と一日に二回変化する。

午前八時半ごろ最も緩やかになった東流は、正午ごろ最急となり、そしてその後、午後三時ごろに始まる西流は、午後五時台にかけて最急となる。

源氏に対して西に陣地をかまえる平家が勝つためには、西から東へ向かって流れる東流激しいうちに、この流れに乗って源氏を討ち破らねばならないのである。

もし万一、潮の流れが東から西へ向かって流れる西流に変わってしまうと、西流に乗って東から追いまくってくる源氏によって、平家の船団は狭い早瀬はもとの瀬戸に追いこまれ、千余の平家方船団は身動きを失って敗北することとは明らかであった。

またこのとき、周辺の陸地には、範頼率い

る七千余騎の源氏の武者たちが布陣していた。つまり、もし海上のこの合戦で平家が敗れた場合、平家が付近の陸地に上陸して逃走もしくは戦うことは、不可能になっていたのである。

平家にとって絶体絶命の境地に追い込まれている戦いであった。そして彼らが勝利するには、是が非でも正午過ぎまでに決着をつけなければならぬのである。

その朝、三月二十四日の朝が来た。

午前六時である。源平それぞれの船団は海上三十余町を隔てて相對峙していた。

正午が近づいてくる。源平の距離すでに三町余にせばまって、源平双方、周辺の海陸轟とどろくばかりに関との声をあげ、矢を射掛け始めた。戦闘開始であった。

平家方の先陣山鹿やまがの兵藤次秀遠ひふどうじひでと。

九州一番の精兵とその名も知れ渡った彼は、率いる精兵五百人を選びすぎり、船々の船先と艦ともに立たせると、命令一下、兵たちは

五百の矢を一斉にひょうとばかりに放った。と、射すくめられた源氏の船は漕ぎ退いていく。

この様を見た平家方からは、「味方すでに勝利せり」と勝ち鬨^{どき}の声が沸き起こる。

その中を、なおも飛び交う矢音。攻め太鼓の音。

門司、赤間、壇ノ浦一帯を指す早瀬の瀬戸は狭い。この狭い水路を、西から東へ溢れるように通過する潮流と、その潮流に乗って一斉に攻撃してくる平家に逆らいかねて、源氏の船団は一斉に押し戻され始めた。

一方、潮流に乗った平家の船団は、退いていく源氏の船団を追いかけ追いかけて、互いに矢で射殺し、さらに熊手を打ちかけては相手の船に乗り移り、刀で切り合い、狭い海峡はたちまち激しい乱戦の海と化していった。

潮流はなお東流である。

源平双方、兵たちの喚^{わめ}きと矢音が激しく交差する中、どちらが勝つとも見えなかった。

八

乱れ戦うこと数刻が経過。

どちらが勝っているか、不明であった。

とその時、ふいに、一叢^{ひとむら}の白雲とおぼしいものが、源氏本陣の船上にたなびくのが見えた。

白雲と見えたものは白旗であった。

主なきその白旗は、一流れ空に舞い上がり、そして舞い下りたと見るや、源氏の船の舳先に留まった。

やがてまた白旗は、激しい海風にあおられて大空へ舞い上がっていく。

白旗は八幡大菩薩のしるしであり、八幡大菩薩を氏神にいただく源氏の旗でもある。

「お、」

源氏本陣の船に止まり、やがて空高く舞い上がっていく白旗を仰ぎながら、源氏の船々からは感嘆の声が上がった。

「八幡大菩薩のみ旗がわれら本陣の舳先に舞

い降りた。これこそ大菩薩がご守護くださるしるしである。どうして戦いに勝たぬはずがあるうぞ」

源氏は互いに勇み立った。

「あれはあれは」

この様をみた平家の武者たちは、ハツとして船べりに駆け寄り、源氏の船団ひしめく海上の白旗を見上げた。

「あれはあれは」平家方御座船ござせんでは、宗主宗盛も白旗が舞い上がるのを見た。

周章狼狽した彼は、空に舞い上がった白旗を指差しながら、

「あれはあれは」

あとは声にならず、宗盛は傍らの陰陽師おんみょうしに訊ねた。

「さよう、あれは……」

陰陽師が答えを探しているその時、

「あれ、あれ、またあのような」

今度は海面を指差しながら宗盛は叫んだ。

「い、い、海豚いかではないか。海豚ではないか。

な、な、なぜじゃ」

はっとして、側に控えている一同が指差された海面に目を注ぐと、何処から現れたのか、海豚の一群が、源平の先陣同士が乱れ戦う海上の隙を掻き分け掻き分け、帝みかどや宗盛が乗る御座船を目がけて、大きく口を開けて泳ぎ来るではないか。

「な、な、何じゃ。あれは」

震える手を指差して宗盛は陰陽師に訊ねた。陰陽師はもっともらしい顔をしながら吉凶を占っていたが、やがて、

「この海豚、このまま泳ぎ過ぎましたら、お味方危なく見えます。元の方へ泳ぎ戻りましたら、源氏が滅びましょう」

陰陽師の言葉が終わらぬうちに、海豚は口を動かしながら平家の船の下を泳ぎ過ぎていった……

九

平家方が突然現れた海豚に騒いでいるちょ



うどその時、白旗が源氏本陣の船の舳先に止まり、大空高く舞い上がって天空に消えていくのを見た源氏方将兵は、勇み立ち、帝が乗る唐船に近寄ろうとして、懸命に矢を射掛けはじめていた。

「武蔵坊、いかにあの唐船^{からがね}に近寄ろうとしても、平家では大船小船^{とえ}十重二十重^{はたえ}にとり囲んで、どうにも近づけぬ」

四辺の海上を睨みながら、傍らの弁慶に義経はいった。

「あと一時^{いっとき}持ち堪えれば、潮の流れが西に変

わります。さすれば勝利はわれらのもの。あと一時のことでございます」

真昼の太陽に照らされて、いっそう、精悍にみえる義経を振り返ると弁慶は答えた。

とそのときである。

あたりにいた侍たちがハッとしていっせいに舳先を見あげた。ひゅうツと風を切って大弓から射られた大矢が、大きい唸^{うなり}りをあげて義経が乗る船の舳先に当たったのである。

大矢には結び文が結わえられていた。

舳先から矢を抜きとった侍が持ってきたの

を、義経は急いで開いた。

「謹んで九郎殿に申し上げ候。」

平家方唐船は囷^{くら}にて、雑兵どもに武者の装いさせて乗船させて候。帝の御座船はそれより離れたやや大きな、せがいに隙間なく楯引き並べた兵船にて、われらは、後詰^{ごづめ}第四陣の指揮に当たる者なれど、この度の合戦には源氏にお味方することに決定いたしたれば、頃おいを見計りて背後より平家本陣を攻撃する手筈に候。

この旨、何卒よしなに御取り計らいあるべく、申し上げます

阿波民部重能^{あわのみんぶしげよし}

開き読んだ紙片をふたたび小さく折畳みながら、義経は弁慶にいった。

「民部重能の矢文^{やぶみ}よ。唐船は囷とある。源氏に内通したいとあるが、わぬし、民部重能を存じておるか」

「屋島の合戦で生け捕りになり、われらに寝返ることを誓いました田内左衛門の父でござ

いましょう。重能自身は、清盛の時代より平家に忠勤しておりました阿波の豪族にございます」

「忠勤しておった者か」

「子への愛に惹かれたのでございますな。子息がわが方に捕らえられましたゆえを以って、平家を裏切る心と見えまする」

「この矢文、囷ではあるまいな」

そういうと、義経は重能の矢文を弁慶に見せた。

「唐船を囷にしているとは、ありそうなことでございます」

弁慶はことばを切った。

一瞬、戦乱の海と化した周囲の争乱を忘れたような、沈黙のしじまが二人の上に流れていった。

やがて弁慶は、

「……子息をわが方に押さえられている民部が、われらを欺き、かかる矢文を仕掛けてきたとは考えられませぬが、しばしが間、民部

率いる後詰の四陣が、平家を裏切つて真実その背後を突くかどうか、様子を見てはいかがでありますしょう」

「ふむ」

義経は深く頷くと、周りに控える侍たち一同を決然と見回した。

「これでわれらの作戦も決まった。後詰の民部が平家を裏切るとなれば、いよいよもつて勝利は必定。潮の流れが西に変わるまであと一時だ」

義経は続けて、

「今より最後の作戦を始める。わぬしら、兵を狙わず、まず敵の水主、梶取りどもを狙え。こいつらを片っ端から射殺し、切り伏せろ。兵を射殺し、切り殺すのは、その後ぞ。義経、しかと命ずる。わぬしら、これを各船団全員に触れて参れ」

「おおっ」

勇み立った侍たちは、義経が乗る本船を離れると、源氏の船を船から船へと飛び乗り飛

び移り、義経の命令を触れ廻りはじめた。

水主、梶取りは戦闘員ではない。海の戦にも一応の約束事があり、非戦闘員である水主や梶取りは殺さないのが暗黙のルールであった。

だが義経はこのルールを無視したのである。

「戦に勝つためにルールはない」

やがて…

船を漕ぐ水主、梶取りを片っ端から射殺され、切り殺されて、山麓の兵藤次秀遠指揮する三百余艘の平家先陣の船団は、漕ぎ手を失つて、あちらの大船こちらの小船、兵士たちが喚き騒ぐ中、次第次第に、海上を漂う木の葉にも等しくなり始めた。

とそのときである。

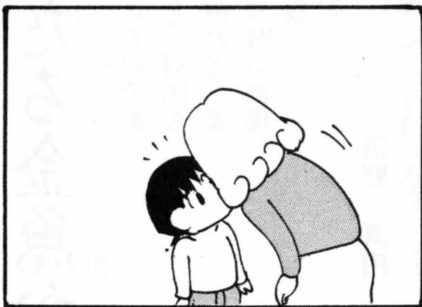
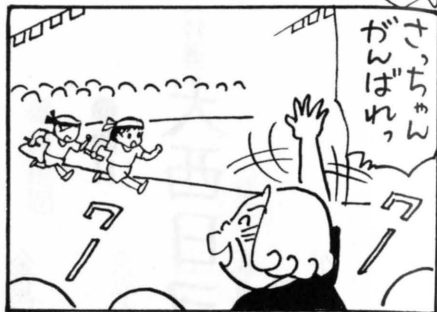
潮の流れは東流がびたりと止み、不気味にゆるやかに、そして次第に激しく、潮は西流に変化し始めた。

(つづく)

さっちゃんはネッ

54 かい

かまち♡ふしろ



浄土誌上句会

●金魚

〔特選〕
掬えねば二匹呉れたる金魚かな 増田 幸昌

祭りや縁日に金魚すくいはいは付きものである。紙のたもどうしてと思うほど、何匹もすくう人もいるが、作者のはすぐ破れてしまったのだ。二匹というのはそういう時の相場だろうか。ビニール袋を提げて帰る。

〔佳作〕 水中花一本入れて金魚飼う

浜野 具円

十二回引つ越したる金魚玉

斉田 仁

金魚埋め石を据えたる庭の隅

山中 洋子

●西日

〔特選〕
大西日ヨツトの蛇行始まりぬ

石原 新

帆を揚げて港を出る。沖に出るに従って風が出てきた。波に乗るのも楽しみなのだろう。か。「蛇行」には、いろいろの状態が読み手

選者=増田河郎子

〈特選〉

づかづかと十葉ふみて検針夫

中島富士子

●自由題

〈佳作〉

海鳥の一閃よぎる大西日

河合富美枝

山々に西日高野の聖かな

西大寺敏郎

天守閣西日を返す屋根の反り

浜口 佳春

に任されているのだろう。ひりひりするよう
な西日がこの句にふさわしい。

検針というと電気やガスもあるが、ここ
は水道とするのが妥当だろう。それに十葉が
あるから、裏庭にメーターがあるとするのが
よいように思う。「づかづか踏んで」が、い
かにもそれらしくてよい。

〈佳作〉

丸文字の少女の願い七夕祭

井村 善也

今日も暑しやたら目の行く死亡欄

池田 伊吹

炎天を来し行商のものを買っ

寺下 忠至

寝ころんで盃の中の月を飲む

岱潤

米沢藩の第九代藩主に上杉鷹山という人物がいる。以前アメリカ大統領のジョン・F・ケネディー氏が日本の政治家で最も尊敬する人としてその名をあげた人物である。

藩の財政が困窮していたとき、十七歳で養子から藩主になり、大倭約令や様々な産業を興して藩の財政を立て直し、また備蓄米など様々な方策を行い、天明の飢饉の餓死者は、全国平均の半分以下におさえた。そしてさらなる改革を先進し、財政の建て直しをするためとして、家督を三十五歳の時に息子に譲り、政務に専

心した。その後寛政の改革として、農村の復興のため、堰（水路）の建築や他領からの移住者を歓迎するなど農業を元気にさせた。

こうした改革は、列挙するとそのすばらしさ、成功例ばかりに思われるが、実は鷹山の改革が、実を結び、花開いたのは晩年を迎えてのことだったようで、七十二歳で逝去するまで、実は苦勞の連続であつたようだ。あの「なせばなる、なさねばならぬなにごとも、ならぬは人のこの言葉は成功者として上から下に言つた言葉ではないようだ。むしろ鷹山自身が自分を励ますために書き残した言葉で

あつた気がしてくる。そしてそう思えた時この言葉がとつても輝いて聞こえてきて、鷹山のことをまた尊敬できた。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十四巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

発行

平成二十年 九月一日
平成二十年 十月一日

発行人

編集人

佐藤良純

大室了皓

印刷所

株式会社

シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話

〇三三・五七八・六九四七

FAX

〇三三・五七八・七〇三七

振替

〇一八・〇八・八二八七

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
糸原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
肱博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

かいとうおうじょう

皆當往生

皆、まさに往生す
無量寿經亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

生野善應

往生とは、ほとけとの繋つながりをえた人間的よみがえ甦りである。

仏壇で合掌、墓前に献花して故人を偲ぶとき、清々しさ、温かさ、充実感といった宗教感情を体験します。これは、私たちの心とほとけの心との接触を示すことに他なりません。

法然上人は、死による別離をあくまでも回避して、ほとけと人との関係を再構築する救いの世界を提示しました。これが浄土です。その世界を信

じて、コミュニケーションが成り立つとき、そこに心の安らぎが求められるから救われると説いて、その世界に往き生まれることを「往生」と称したのです。

上人の浄土思想の特徴は、楽天的な救いの教えを立ち上げて、人びとの死の不安を拭い取つてきたことです。

法然上人鑽仰会の本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円

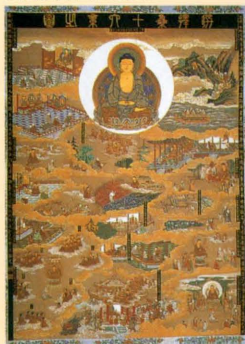


月刊『浄土』
バックナンバー

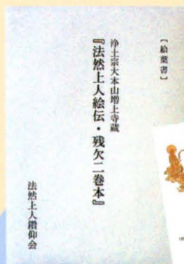


『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より